

# 全国まなべ会会報

編集と発行 全国まなべ会広報部 事務所

〒764-0023 香川県多度津町若葉町9-13  
TEL & FAX 0877(33)4512

## 第四十二回全国まなべ会 伊予大会のご案内



伊予まなべ会  
会長 眞鍋敏朗

謹啓早春のみぎり全国まなべ会の皆様にはご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は、本会発展のために格別のご指導とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

昨年、阿波におきまして盛大に開催されましたことは、誠に同慶の至りで改めて阿波まなべ会の皆様には深く感謝申し上げます。

さて、令和7年の第42回全国まなべ会総会は、伊予新居浜で開催させて頂きます。伊予まなべ会としては、平成26年の第34回大会以来10年ぶりに4度目の開催担当となります。

愛媛県はまなべさんの世帯数が一番多く、約1600世帯戸にもなります。主に東予地方に集中しており、伊予まなべ会としてはこれらのまなべさんに、全国大会のことを知らせ会員も多数おられました。全国同様高齢化で会員数が減少しているのが現状ですが、会員の皆様には、是非とも参加していただき、まなべ一族の足跡を忍び、ご先祖様への崇拝と、感謝の念をささげたく存じます。

ここ新居浜は、440年前の戦国時代、天正の陣にまつわる東予地方の戦いの中心地であり、秀吉軍相手に金子城を始めとする各城主や真鍋一族が果敢に戦いましたが敗れ、一族を弔ったのが慈眼寺で菩提寺となっております。

総会翌日の観光は、慈眼寺の参拝を始め、住友グループによって1975年に開館した記念館で、半地下構造で坑内をイメージして建てられている別子銅山記念館を見学し、江戸時代に一弦琴を復興した真鍋豊平の生まれた千足神社の参拝と一弦琴保存会による演奏の鑑賞、また、全国まなべ会には先祖の出身が多くおられる真鍋家祖霊の墓を参られたらと思います。最後に四国三大祭りといわれている新居浜太鼓台が展示されているあかがねミュージアムで太鼓台の見学と毎年10月に開催されている新居浜太鼓台祭りのパノラマ映像を鑑賞されたいと思います。

この機会に是非観光にも参加されるよう、お勧めいたします。

## はじめに

昨年の天候不順による稲作不作で、昨年以降からコメの販売価格が上値づいてきている。この原因は、農協ルートを通さない自由販売の商社や、にわか仕込みの暗躍ルートでの在庫積み増しによる価格期待を狙った資本の流入があったものと想起します。身近な生活必需品であるコメのひつ迫状況に対して、政府備蓄米の蔵出し放出対応が遅いのではなからうか。やと実施計画に移ったようでありませぬ。確たる信念とスピード感が要求されましよう。

また、これまでの為替円相場が弱含みで、輸入物価の高騰により生活必需品や畜産農家の飼料の高騰が起こってしまった。つい最近では、少し円高に推移している様ですが、まさに世の経済は投機的に作動している。素人には予測のつかない時代になってきている。商売上での切り札を持たない個人や国家にあつては、外交交渉において舵取りの大変難しい。暦年に遭遇してくるのではなからうか。特にアメリカのトランプ外交の実利的、ブローカー的ともいえる手法に各国は翻弄されそうである。さてわたしどもの組織において、高齢化が進展してきて、時代に沿った組織運営が確かに困難な状況になりつつあるのを感じています。同族会の活動は、皆さまの交流による楽しみの時間や場所づくりの機会を企画するものです。その一環として

て歴史探訪や交流会を企画しており、また本件のような会報誌を作成して皆様方に配布しています。ただ、各人の高齢化の問題、後継者の確保維持問題に遭遇するなど、完全なものとなつていません。しかし、これからは床に臥せさないための「健康寿命」を長くするためには、個人が自ら意欲的に他者との関りを持つことが大切と言われています。この「同族会の会報誌」作りは如何様にも魅力ある企画が期待できるものです。時代が無機質なデジタルの世界が来ようとも、孤独な世界に埋没してはなりません。手造りのほうが「味と情」が温かいかもしれませぬ。機械的、効率的手法は一面、冷血さを持ち合わせています。じつくりとした余裕対応の人には不便です。

今回の全国大会は、「まなべ」姓の多い愛媛県で開催されます。まずもって同族の方々と交流を始めるといふ気持ちで積極的に進めてください。この大会ではわたし達にとって「元気の源である英気」が得られるものと確信いたします。

親族の方々やお友達をお誘いの上、お気軽に参加いただきたいと存じます。健康寿命の延長のためには、温かい雰囲気の中の雑談話や、かくし芸の披露も良いのではないでしようか。ともかく会合に出席いただき温かい手の温もりをお持ち帰りください。お会いできるのを楽しみにしています。

國六 記

# 第42回 全国まなべ会 —伊予新居浜大会—

**日時** 令和7年5月24日(土) 15:30～

**場所** リーガロイヤルホテル新居浜

〒792-0007  
愛媛県新居浜市前田町6番9号  
電話0897-37-1121 (代表)

**主催** 全国まなべ会

**開催担当** 伊予まなべ会

## 大会プログラム

第1日 5月24日(土)

- 13:30～15:30 受付
- 14:00～15:30 全国副会長会
- 15:30～16:30 総会
- 16:30～18:30 写真撮影 休憩
- 18:30～21:00 懇親会



あかがねミュージアム

新居浜駅前隣接する総合文化施設「あかがねミュージアム」で、「あかがね」とは「銅」のことで、流線形のカーブに合わせて銅板が張られています。四国3大祭りの一つで新居浜太鼓台が展示されており、太鼓台の勇姿がパノラマ動画で鑑賞できます。

## 翌日観光スケジュール

第2日 5月25日(日)

朝食 ⇒ 集合 ⇒ ホテル発 ⇒ 慈眼寺 ⇒ 千足神社 ⇒ 昼食 ⇒ 別子銅山記念館 ⇒

7:00～ 8:50 9:00 9:10 11:00 12:30 13:30

あかがねミュージアム(新居浜駅前) ⇒ リーガロイヤルホテル新居浜 16:00

15:30 解散

## 会費

- (1) お一人(宿泊の場合)……………22,000円朝食付
- (2) お一人(宿泊の場合/同伴奥方) …… 21,000円朝食付
- (3) お一人(宿泊なし日帰りの場合) …… 10,000円
- (4) 記念写真…本部で撮影し、希望者に後日郵送します。  
尚、集合写真等は、会報に掲載いたします。
- (5) 観光費 …………… 7,500円昼食付

\*子供同伴の場合の費用は、事務局でご相談に応じます。

## その他

- (1) 申込期日/4月25日(火)着
- (2) キャンセル/5月5日までは全額返金、
- (3) アトラクション/懇親会での出場希望者は  
問合せ先までお申出下さい。
- (4) 問合せ先/  
■全国まなべ会事務局  
0897-36-3652、携帯090-4331-0287



別子銅山記念館

別子銅山記念館は、住友の事業の母体となり、また工業都市新居浜発展の原点となった別子銅山の歴史とその事業を永く後世に伝えることを目的として、別子銅山閉山の2年後1975年(昭和50年)に開館しました。館内には、開坑以来の歴史資料や鉱石、採鉱技術資料、鉱山の生活風俗資料など別子銅山ゆかりの品々が展示されています。

# 第四十二回新居浜大会のご案内

令和七年度の全国大会は、愛媛県東予地区の新居浜で開催されることになり、この地域を多面的に観察し紹介したい。

## (東予地区の産業)

ここ東予地方は、産業面では特有の地場産業が発展した地域である。例えば東地域の三島川之江地区においては製紙業が盛んで、現在では紙製品、衛生用品の生産領域まで進展している企業が存在している。また新居浜周辺では化学、機械産業が立地する地域である。また今治周辺では、日本を代表する造船業の集積地であり、一方、輸送船舶を多く保有する海運会社が多くあるが、船籍は外国地に保有するものもあり、実際の船舶保有数では大きく、リース契約により内外の海運業者へ貸し出ししている現状で、保有船舶数は大きいものと想定される。

## (東予地域の歴史散策)

この地域で発生した歴史上の「まなべ」に関係する大きな

事柄は、まず大きな戦争となつた天正の陣である。次には立川銅山と住友の別子銅山との係争事件である。

## ①戦国末期に発生する「天正の陣」である。



天正の陣法要

この戦いは、四国で最後の雌雄を決する豊臣と長曾我部の代理戦争となった。

この天正の陣は、四国をほぼ統一した長曾我部元親と天下統一に挑戦する豊臣秀吉との戦争が勃発し、戦いの修羅場になったことである。双方で約一千人の死傷者が発生した大きな戦いとなった場所である。相手陣の先発者である毛利方の小早川隆景と金子元宅とは知己の間柄であつたが、運命の仕業により

敵味方となつて直接対決することになった。土佐方との約束を反故にせずに、武士の義を通したのである。

武士の義を通した敵方に對して、小早川も、相手の戦死者(金子側)を悼んで小早川隆景は甲冑を羽織つたまま、甲冑の踊りを戦死者へ急仕立ての場で舞を捧げたとされている。この踊りが辛亥踊(トンカカさん踊り)と言われている。新居浜の



トンカカさん踊り

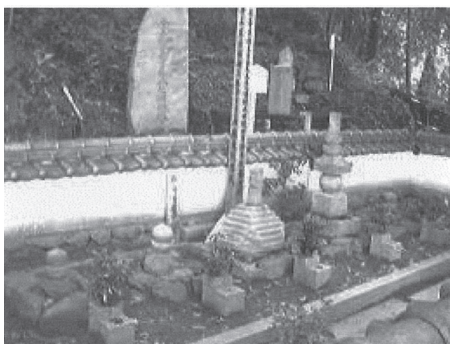
金子元宅が伊予、土佐連合軍の総指揮を執つて戦つたが、敵味方の双方で凡そ千人の死傷者を出した四国一番の大きな戦争となった。金子殿の子息たちはそれぞれ離散し、生き延びているが、土佐に逃れた末っ子の新発智丸の子孫では金子直吉がおられるが、有名な神戸の「鈴木商店」を取り仕切っていた方であ



慈眼寺

る。

また、テレビ東京のなんでも鑑定団で伊予の戦国大名に関わる金子博物館が福岡県にあると紹介されたテレビ番組を見たことがある。所蔵されている甲冑や刀剣などが確か紹介されていたのを思い出すのである。このご子孫の方が新居浜慈眼寺の「真鍋六人衆の墓地」の改修に関わっていただいたのである。



真鍋六人衆の墓地

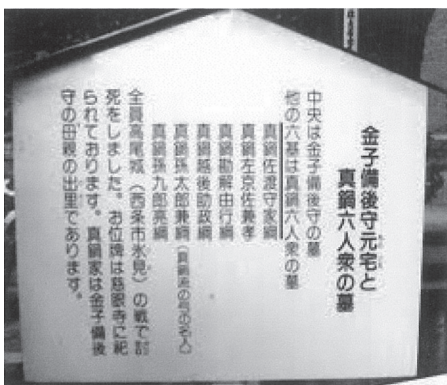
福岡市に在住されていて、まなべ会の会員にご加入いただいている。

## (参考資料)

- ・全国まなべ会会報第四十七号、同四十八号
- ・明治文庫の会会報第三十四号(筆者寄稿「本能寺の変と新居浜歴史余話」)

次に二番目の立川銅山と別子銅山の係争事件である。この事件は下手の立川村と上手の別子村との係争事件ともいえるものである。

②立川銅山と別子銅山との係争  
ご存じの通り、新居浜の真鍋氏はかつて江戸時代に立川銅山を大坂の事業者から経営を引き継ぎ、銅山業に努めていた。ところが、後から岡山の吉岡銅山



を経営していた住友泉屋に、以前勤めていた「切上がり長兵衛」は、南側に銅含有率の高い鉱石脈を見つけた。その時長兵衛は立川銅山に努めていたが、その前までは泉屋に努めていて恩義を感じたものか、この旨い情報を真鍋側でなく住友に提供したのであった。この情報の信憑性に興味を示した住友の和泉屋は、今まで事業していた岡山の吉岡銅山からこの別子村への事業転換を計ることになる。

その後、山の峰を双方から掘削してきたものだから鉢合わせになり、衝突することになってしまふ。おまけに上方の別子村側の燃料木材の乱脈伐採などにより下手側の立川村では雨による土石流の被害を受けていた。そのことなどで両村は敵対する関係になっていった。この関係を背景に、また両鉱山の発掘現場での衝突である。立川側は西条藩であるが、別子の方は天領地としていたため、両者の係争申し立てでは、地元での決着は出来ずに江戸幕閣での采配となる。結局、立川側の敗北となつてしまい、江戸へ関係者三人が送られ入獄されることになる。そのうち一人は獄死をする。ところが、二年間収監され

ても放免とならず、ある日の夜、牢屋の錠が外されていて立川側の二人は西条藩の藩邸に入り藩主帰国の折に故郷へ帰ってくるのである。そもそも判決の内容に無理があつたのではと推察される。その後、立川銅山は別子銅山との争いで敗北して経営撤退している。しかし、この新居浜の歴史では真鍋家の方が先住者であり、早くから地元を根を張つて来たのである。

ところで、令和六年度の言葉は「金」である。次の三番目に住友金属工業について言及してみよう。

③ <sup>せいかね</sup> 銭金の金とオリンピックの金メダル

銭の金は些か持つている人たちが多くいるが、オリンピックの金は限定の人達しか入手出来ない代物である。本物の金はこのところ価格が上昇している。日本で金の生産量が飛躍的に増えていけば、売却して少しは国家財政も豊かに落ち着いてくるかもしれない。

さて当地に関係する住友金属工業は鹿児島県に有力な菱刈金鉱山を持つている。この鉱山の金含有率は大きく有望な鉱山である。また、大隅半島の錦

江湾の入り口の海中には、金含有率の大きな鉱石が存在しているが、その掘削が困難な状況にある。このような状況の場所はある。日本には多いようであるが、何せ日本は火山王国である。火山帯の海中岩石に含まれる金の掘削と洗浄には環境上大きな影響問題があり、今後に生産期待出れば、日本国も金塊のおかげに有り付けば存在価値が上がるというものである。

わたしどもの郷里新居浜はかつて有力な別子銅山があつたが、その後、昭和四十八年に事業を停止している。しかし当地においてはその後も各種住友に関連する多くの事業所が立地して今日に至っている。

(この地の神社、仏閣)

この地域の神社仏閣では、真鍋氏が深く地元浸透していた形跡が見られることである。例えば伊曾乃神社、千足神社、・・慈眼寺などである。何れも「まなべ」と深くかかわりの有る歴史遺産である。ここ四

国中央市にある神社の係累者が明治時代に北海道へ渡つておられる。初代会長真鍋藤治さんや従兄弟の真鍋八千代さんなど四国中央市の寒川土居あたりから



(この地のお祭り)

ここ新居浜の「新居浜太鼓祭り」は毎年十月十六日から十八日にかけて開催される。四十数台の太鼓台が集結してかき上げるさまは絢爛豪華であり、また勇壮そのものである。ここ東予地方や讃岐の西讃岐方での祭りとは相通するところがあるが、何分台数が多く豪華で迫力満点である。

また「西条祭り」も十月のスポーツの日を基準として開催されるが、この祭りも絢爛豪華であり、地域を流れる賀茂川の流域に集合してお披露目するので観覧者達の目に大きな印象を与えている。京の上方づくりで、山車は上品でまた新居浜のものとは違つた趣を感じる。

\*伊曾乃神社所蔵の豫洲新居系図(国重文)は、和気系図、海部系図とともに日本古三大として貴重な歴史遺産である。新居氏は「伊予御村別」の子孫の豪族である。

(参考資料)

・京極会会報 第十号

(筆者寄稿)「新居浜の銅山経営」

北海道に渡つておられる。真鍋八千代さんのご先祖は北海道へ移住しておられる。当人は北海道から東京へ出てこられ、都内の中央大学の法学部を卒業され弁護士になっておられる。その後、活躍され、人望があり、しかも人格識見のある方であつたため嘱望されて多くの会社役員、監査役として執務されていた。八千代さんは終戦後には、プロボクシングのコミショナーをされており、世界チャンピオン大会の折にはリングの上でマイクをもつて試合の開始挨拶をされていたのを想い出すのである。西の小林一三さんとは縁戚にあたり、ご兩人とも大変ご活躍されておられました。当まなべ会の初代会長真鍋藤治さんとは従兄の関係にあたります。

また慈眼寺は金子元宅の弟が一族を引うために建立したお寺であり、金子氏に関わる関係者が多く祀られているお寺である。現在三重大学大学院教授の藤田達三先生のご先祖はこの金子氏の家老の家筋ではなからうか。

# 各地からのお便り

## 讃岐から

コロナ感染から解放された昨年十一月の二十四日に久方ぶりに史跡巡りを行った。香川の東讃地区の史跡や食を楽しむ行程であった。真部五郎助光と関わりのある長尾の集落は、秋の味覚である栗の本場でもある。栗三味といきたいもので、この地はまた四国遍路の終着駅となる八十八番札所の大窪寺がある。

この集落の真部家にある「真部家古文書」は、とても貴重で、地域の歴史が如実にわかる歴史資料として大変貴重である。これをコピーとして展示しているところが「へんろ資料館」である。

当日は、前山ダム、へんろ資料館、資料館では館長の片桐孝治さんから丁寧な説明を受けた。ここから結願寺である大窪寺を参拝し、昼食は、落ち着いた風情のある竹屋敷で栗ご飯など賞味するのとなった。



へんろ資料館

## 岡山まなべ会から

昨年十二月の二十一日(土)に岡山県の里庄町の図書館二階で「真鍋島今昔物語」、副題は……佐藤清明から読み解く真鍋島の歴史・民族・自然……と題した講演会が開かれた。講師は武井優薫氏であったが、現在、笠岡市地域おこし協力隊の業務に従事されている。彼はこの四年半前から「真鍋島」に居住して活動されているが、彼は現地主義を信条としており、これまで中米のパナマでも仕事されていた。

今回のテーマは、瀬戸内の真鍋島が保有している歴史・民族・自然など研究していた里庄生まれの学者「佐藤清明」について講演されたものである。この里庄町は、原子物理学の父である「仁科義雄」博士の出身地でもあるが、またこの講演題名記載の「佐藤清明」の出身地でもある。佐藤は、かの有名な南方熊楠と交流がある植物学者である。若い時に第六高等学校の先生をされていた。

この講座の講師をされていた武井氏は、わたしどものふる里「真鍋島」の貴重な歴史などの資産に価値を認め、内外に情報発信されている姿勢に感謝申し上げます。

第4回清明を読む会

**真鍋島今昔物語**

佐藤清明から読み解く  
真鍋島の歴史・民俗・自然

12月21日(土)

午後1時30分～  
たいけい ひろのぶ  
講師：武井 優薫氏  
(笠岡市地域おこし協力隊)

場所：里庄町立図書館2階  
視聴覚室

対象・定員  
一般・40名  
(応募者多数の場合は抽選)

図書館に來館、または電話、メールで申し込んでください。

申込期限：12月19日(木)

お問い合わせ先：里庄町立図書館  
TEL:0865-64-6016 FAX:0865-64-6017  
Email:shinet@shinet.town.satohiroshima.jp



千足神社境内



千足神社弦琴演奏

関東まなべ会から

同族の仲間たちとの再会を飲む「関東地区まなべ会からの報告」

このところ感染症問題も社会免疫の獲得度も高くなってきたことから人的交流も進んで来たようです。このほど久しぶりに関東地区で「まなべの人たち」の会合が持たれたようです。ご紹介します。

関東五県の合同の親睦会（関東地区まなべ会）が二〇二四年十二月十五日（日）千葉にて五年ぶりに開催されました。

コロナ禍で中止になっていた五年間ではありますが、久しぶりに会えた喜びに各自が感動的でした。都合によりやむを得ず欠席となった人、体調不良や病気のため欠席になった人もおられました。五年間の空白は、個々人にとっても大きな出来事です。中には顔を忘れかけた人もあったようです。

会場は二部制とし、第一部を昼の居酒屋で二時間、そのあと移動してカラオケ店で第二部を三時間。皆さんからの近況話の報告や自分の家系のルーツの話でアツという間に五時間が過ぎてし



まいりました。皆さん一人ひとりから戴いたお話はとても貴重なものばかりでした。

特に、全国まなべ会発足の元となった越智栄次郎氏が著した「豫洲眞鍋氏史話第一集」の話、中村庄屋と金子庄屋の菩提寺である慈眼寺建立に関する話、住友と争った別子銅山の話、秀吉の四国攻めで戦った眞鍋氏の奮戦記（天正陣）、眞鍋氏による平将門征伐と首塚の話など紙面に残されたものもありませんが、口伝にてしか伝えられない内容も多々あるようです。

日本全体が高齢化の時代にある現在、いずれ消えていくであろう「まなべの物語」を各眞鍋氏家においてもあるいは地域においても少しでも多く継承していくことの大切さを改めて切に感じました。

今回の懇親会出席者は、静岡まなべ会眞鍋梅美さん、神奈川まなべ会眞鍋彰さん、東京まなべ会眞鍋尚孝さん、眞鍋美紀さん、眞鍋武さん、眞鍋静夫さん、眞鍋克博さん、埼玉まなべ会眞鍋陸太郎さん、千葉まなべ会眞鍋明広さん、眞鍋元與の以上、十名でした。

最後に、次回の第四十二回全国まなべ会総会（伊予大会）での再会を誓って散会しました。

千葉まなべ会 元與

阿波から

阿波の総会は、例年二月十一日の建国記念の日に行われている。今年の令和七年二月十一日前には、ここ四国の山並みにも大雪が襲来していた。従って翌日には路面が凍って危険を想定していたのだが、幸いにも予想がはずれていて、当日は寒さも緩んで路面の凍結も回避されることになった。

今回の第46回阿波まなべ会総会には、事務局長の隆資さんが編集された昨年主幹開催の全国大会の様子を、正面の幕にビデオ再生されたのが大変印象的であった。電気機器や写真撮影の高等技術の技に筆者は大変驚嘆したものです。

四国の地酒をお勧め



四国各地の山河から湧き出る水はたいへん美味いのである。この水を利用して四国各県においてお酒が醸造され、阿波の三好市池田でお酒祭りとして紹介されている。日本のお酒がユネスコの無形遺産に登録されてから海外からも関心が寄せられるようになった。

この二月二十二日に地酒試飲会が池田総合体育館で催された。この開催にあたって実行委員長をされていたのが、阿波まなべ会の役員をされている「眞鍋浩章」さんでした。地元商工会議所の青年役員としても頑張っておられます。地域活性化のためには、地域から有効な情報発信が大切であります。今後も期待できる地域遺産を発掘し、付加価値を付けて地域内外から関心を高められるよう頑張ってください。

國六 記

# 備讃瀬戸内には二つの富士山が観える

先進国においては人口の減少傾向が観られるだけでなく、しかも日本においては東京を中心として人口の一極集中

化現象が観られる一方、都内でも高度化の時期に建てられた高層アパートで住民の高齢化が進んでいる。地方都市にあっても地方の中核



山田方谷

都市の中心部では人口が増えているのである。人口の減少傾向は購買力の減少となつて経済活力の低下に繋がることになる。また地方で高齢者が減少するとともに、地方の金融機関から金融資産が東京などの金融機関へ移管されることになる。この実態は顕著なものでなからうか。

地方で起こっているこれらの傾向を打破するために、各地方領域では方策を立案し、対処しておられる。現在では情報網の発達により良策などは普遍的に各圏域において知ることができるのである。然しながら近代化を迎えていた江戸末期に頃において各藩の対応は如何様なもの

であつたのだろうか、探求してみたい。

各藩は、いわば独立した分国の存在であり、

各藩の保有している人、物、金、無形資産の良し悪しが藩経営の財政を左右するところになつていた。この時代にあつては、備中松山藩においては大変な財政悪化をきたしていたのである。財政赤字の累積が十数万両、今の金で換算して凡そ二百億円見当



丸川松陰

あるうか。これを山田方谷は七年余りで債務を解消し、おまけにそれに近い金額を積み重ねることに成功している。この方策は幕閣のみならず、各藩の殿様にも知れ渡ることになる。この事例を知つた越後長岡藩の河合藩の山田方谷を訪ね弟子入りしたのである。その手法を学んだ

河合繼之助は自分の藩の財政改革に成功することになる。鼻っばしの強いじゃじゃ馬、たつた河合繼之助であつたが、山田方谷の人間性に接した繼之助は家老までに出世したが、後の長州との戦争での傷が原因で死去している。

ここに紹介する山田方谷のもとには多くの自藩、他藩の武士などが弟子入りしていたが、彼と関わる多くの人材がこの領域から誕生して

いる。彼の先生は新見の丸川松陰先生である。京都での遊学時には

寺島白鹿に学んでいる。また江戸での学びの師は佐藤一斎である。素晴らしい先生の下で学習していた山田方谷は、帰藩後、嘉永二年(1849)に元締役兼吟味役となるまでの十三年間、塾を開いて塾生の教育に専念することになる。この間有能な人材を育てることになる。この風聞に対し、備中松山藩の六代藩

主勝職に請われて武士に登用されることになる。その次の藩主には、松平定信の孫にあたる勝静(藩主松平定永の八男)が伊勢桑名藩から婿養子として備中松山藩に入る。山田方谷は、この若い藩主の教育係になる。



板倉勝静

やがてこの板倉勝静は第七代の藩主に就任する。そこから山

田方谷は藩主の力添えを得て、これまで積み重なつた十数万両の借財を凡そ七年で返済し、なおかつそれに近い金額の収入を確保することになる。今までの「備中貧乏」と言われていた不評な評判を返上し、なお幕閣にも山田方谷名は知れ渡る有名人になった。一方、藩主の板倉勝静も出世を重ねて老中になり、徳川幕府の最後においては、筆頭老中に就任することになる。

さてこの備中においては、山田方谷は備中聖人といわれているが、JR伯備線の鉄道の駅名に「方谷駅」と人名が付けられ

ている。如何に地元民に慕われていたかが分かる。彼は両親を早くから亡くしており、その後、苦難を乗り越え努力して、やがて藩政のために心血を捧げることになる。

ここで方谷自身の周辺人脈を覗いてみたい。五歳で新見藩の儒学者である丸川松陰の塾で勉学を始めている。そもそも時代を遡れば、彼の先祖は源平時代からの武家であつたが、祖父の時代に重大事件があつてから財産没収され、落ちぶれてしまつていたのである。祖父や父はお家の中で彼は家族から薫陶を受けて育つてきていた。彼は非常に頭の良い子供であつたので、彼の才を認めた家族は新見の塾で勉学をさせることになった。

その後も学をきわめ、飛竜のごとく世間へその存在が知られるようになる。自分で開塾し、多くの優秀な弟子たちを育てることになり、彼の名声は藩政にかかるといふ程に及ぶ。市井の彼の運命が開けてきた。市井の学者から、やがて藩士に登用され財政家、政治家、そして晩年は教育家へと多角的に箔を重ね

てゆくのである。

彼は藩政の重責を負ってからは、藩の借財解消のため諸施策を実践して藩財政を好転させた。地元の殖産興業のため多角的に産品生産、例えば砂鉄をそのまま売却せずに、加工して農具の三つ目鋏などを生産して、需要の多い江戸で高く売却できる方策をとっていた。その運搬のために藩の飛び地である玉島港や高梁川の改修そして船宿の充実を図っている。そして玉島から江戸への海送のための輸送船も造っている。

また公的業務の一線から引退しても、弟子たちのその後の塾経営の面倒も見ており、岡山各地へ、旭川や高梁川そして支流などの船便を使って赴いている。さて塾で教えた弟子たちを地元中心に例示すると、進鴻溪、三島中洲、林抑斎、河合継之助などがいる。山田方谷は多方面で活躍していたことから、彼の至誠惻怛の信条は県下のみならず、



三島中洲

ず、近隣にも信奉者が多くいて

継承されている（中国山地領域の大地主階層、児島の野崎家の大久保兄弟（もつとも弟彦三郎は三島中洲の弟子）。多くの塾生の中から第二代目、第三代目の信奉者が誕生していくことになる。最近ではノーベル医学賞を受賞された山梨県の大村智博士の信条は「至誠惻怛」である。関わりを辿っていくと、奥様が新潟県の河合継之助と同じ出身地（長岡藩）であることが判明した。遠隔の現代人でも信奉者が出ていることに関心を寄せるのである。

備中地域に関わる山田方谷の思想信奉者を岡山県に関係した人物で概観してみると、岡崎嘉平太、土光利光、三木行治、大原孝四郎、大原孫三郎、川崎祐宣、団藤重光、松田荘三郎など実業界に限らず、教育、文化芸術界の世界でも多岐にわたって排出している。

一方、瀬戸内の対岸にある香川においては、宗教の大家「空海」が誕生している。日本の各地で弘法大師空海伝説を聞くことがあるが、当時の先進地である唐時代の中国渡って勉強して

いるが、二年弱で帰国している。

やはり日本の宗教哲学が中国のものより優れていると悟り帰国の途に就いたものである。時代の変動期には優秀な人材が登場している様である。香川県においては、高松藩の元藩士であった中野武宮さんの業績が見直されてきた。香川県誕生の生みの親として再認識されてきたので



中野武宮

ある。それというのも、幕末における高松藩の対応が時の薩長中核の政府に睨まれ、香川県の誕生は大いに遅れたものである。中野武宮さんは、洪沢栄一や阪谷芳郎と大いに関係が出来、また政界の大隈重信などの援護や地元の結果も出来上がり、彼は大きな仕事の目標である香川県独立の誕生を成し遂げることができた。香川県民は、県誕生の経緯について熟知してなかった

のであるが、この大仕事達成の裏には偉大な人物が中心にいたことに無知であったのである。それ故、今までは一部の人を除

いて存在感が知られていなかった。

しかしこのほど本来の実績を県民が知ることとなったのは、石井裕晶先生の長年にわたる中野武宮の研究によるところが大きい。

また山田方谷の信奉者であった大久保甚之丞、彦三郎は至誠や利他精神旺盛な兄弟であった。弟の彦三郎は山田方谷の思想に傾注していたが、方谷はすでに亡くなっていたため、やむなく方谷の弟子である三島中洲の二松学舎の門に入るのである。兄は四国全体を俯瞰して物事を考えていたから政治の世界へ、そして弟の彦三郎は、まず人材育成を図るために尽誠舎を立ち上げることになった。

一方思想家としては、江戸時代に儒学を基本として朱子学者が讃岐から出ている。

しかし知行合一を旨とする陽明学の方面では、多度津を本拠とする人材として林良斎を挙げられる。多度津藩の家老であったが、大塩中齋に心酔し弟子となっていた。しかし大塩の乱が大坂で発生したため謹慎している。彼は隠居してからは、私塾「弘浜書院」を開き、藩士や一般人

の教育に力をいれている。また

交友していた人物に「池田草庵」がいる。多度津の林良斎とは無二の親友であった。この池田草庵と山田方谷とは交流があったようである。草庵は山田方谷を訪ね、学説を交わしている。

多度津は四国においては、明治維新後に近代化に向けて大久保兄弟が頑張っていたのであり、また林良斎は塾で一般人に教育もしていた。時代の先読みも当然していた事であろう。この瀬戸内の両岸において利他精神と至誠惻怛の心をもって地域を先導しようとしていた事が分かるのである。

バランスの取れた円錐型の讃岐富士が中讃の富士として輝いている。一方備中を中心としたトリアングルの地域にはこれまた輝かしい人材が輩出しているのである。三角型のトリアングルを立体的に立ち上げて三次元にすると、立派な美しい円錐型の富士山の姿になるのである。

讃岐にも備中にも、高貴で美しい富士山の人物を眺めることが出来るのを地元民として誇りにしたい。

# 渋沢栄一の利他精神と自己利益主義者のはざま

全国まなべ会 理事 真鍋國六

東京明治神宮外苑の再開発について、このほどユネスコの諮問機関「イコモス」は危機にある文化遺産を守る目的のため意見書を東京都に提出している。しかし東京都は広く民意を聞くことなく、関係者の意見統合のみで開発計画推進のゴーサインを發出させている。

そもそも明治神宮の内苑と外苑の建設に当たっては、当時東京市の市長であった阪谷芳郎や財界人の渋沢栄一、そして香川県出身の政治家中野武営（当時は東京商議所会長）さんらが大きく関わり、建設資金を調達して出来たものである。当時、明治天皇逝去への国民の悲しみや崇拜の念の高まりがあった。この国民の創意や東京の将来を見据えた大局的観点から当時の良識人の意見をも踏まえて記念公園が建設されたものである。現在においても、年頭の初参り人数に関して国内一番の参拝者数からして、この神社周辺の崇高さと人気の程が判るといえるものである。

しかるに、この歴史的遺産と言えらる崇高な領域にある神社周辺を、私利私欲を生みだす好物件の建築対象地と考え、東京都の幹部は一部の民間会社と結託して計画を推進しようとしてきた。この領域は、明治期の偉大なる各界良識人たちによって、首都東京を世界に誇れる都市にしようとの遠大な思いで意欲的に計画実行したものである。

ところでこの再開発は地区の景観を好転させるのであろうか、そこが問題であろう。この外苑は、約百年前に作られた人工の森で、緑や景観を守るために日本で初めての風致地区に指定された場所である。この計画実施には、前述のとおり三人の方々の並々ならぬ尽力を重ねて造営されたものである。当時の東京市長であった阪谷芳郎の言によれば、「明治神宮造営に一番貢献したのは中野武営氏である」と述べている。

## \*阪谷芳郎

岡山の井原出身の儒学者阪谷朗蘆の五男で、渋沢栄一の二

女琴子の主人、この時期の東京市長である

## \*中野武営

元高松藩士で、その後東京の商業会議所の第二代会長（初代が渋沢栄一である）、後に政治家に転身、香川県会議員、衆議院議員を務めている。さて、彼らの思想の根底には、

儒教の中で唱えられている利他精神や共生協働思想が宿っているのである。言わば当時の崇高な精神哲学を神宮一帯の創設に発露させ、今では歴史的価値のある稀有な文化遺産にもなっているものである。然るに、今回の東京都の当該開発計画は目先の自己利益を実現しようとする関係機関の行為であり、しかも情報公開を十分に果たしていたものかどうか、疑義の残る案件事項であろう。ユネスコのイコモスや地域住民の強い反対があるなかで、建設を急ぐ意図は何であるのか不思議である。

ところで東京圏域においては、近い将来直下型地震の襲来が予想されており、また、東京一極

集中がまだ進行しているという状況にある。この状態の中で危機管理意識を持って十分対応できる体制の下で事業を推進してきたものかどうか、その情報公開も重要であろう。

ここで神宮の森公園創設の中心人物になった御三方の精神構造を覗いてみようと思う。日本経済財界で当時重きをなし、しかも明治神宮公園の建設推進に理解があつた渋沢栄一の精神支柱を覗いてみたい。

彼は小さい頃から従兄の尾高惇忠から儒学を学び、一橋藩の武士になってからも、岡山備中井原の儒学者である阪谷朗蘆との出会いがあつた。そこでより一層人間味を増すことになる。そして徳川幕府の命によりフランスへ派遣され、そこでヨーロッパの先進事情の実態を知ることになった。

外国の現状の把握を重ね、また、日本国内では備中の井原で阪谷朗蘆との出会いでは、阪谷朗蘆の友人である「山田方谷」の至誠と惻怛の思想にも感化されたのではなからうか。この備中の人材からは日本を代表する利他精神や社会貢献の実践性を学び、その具現性の大切さ

を学んだのではなからうか。山田方谷の一番弟子ともいえる三島毅（後の三島中洲）とも親密な関係を結んでいる。三島中洲は「義理合一説」を唱えているが、渋沢栄一が日本の産業近代化推進に際しての基礎理念は「道徳経済合一説」である。事業活動において道徳との一致を標榜し重視している。その根底理念には両者に流れている思想の整合性が見られるのである。この同方向性の事実にも両者間の精神的結びつきの強いものを感じるのである。

日本人の精神的支柱の中心地ともいえる岡山備中地方には「至誠と惻怛」のふる里ともいえる精神風土が誕生していたのかもしれない。新見の儒学者丸川松陰、備中松山の山田方谷、井原の阪谷朗蘆、倉敷の三島中洲等々、そこに渋沢栄一を加えて考慮すると備中地方の精神的感化力の大きさが理解できるのではなからうか。備中地方を中心とする三角デルタ地帯から利他精神思想の波紋の広がりを考慮してみると、日本国内において特異な現象であると、捉えられるのではなからうか。当時の状況において、阪谷朗蘆、山田

方谷、三島毅（三島中洲）そして  
洪沢栄一の関係性は大変大きなものであったと推察するのである。

それというのも、その後洪沢栄一の二女琴子と阪谷朗廬の五男である芳郎とは婚姻していること、また三島中洲が二松学舎設立において洪沢栄一は多大な援助もしている。一方井原の出身である馬越恭平（阪谷朗廬の塾生）との関係では、ビール会社設立において協力し合っている。また、かつて備中松山であった備中高梁での国立銀行設立においても洪沢栄一の誠実な関与があったことである。

\*奈良時代に和氣清麻呂が吉備から出ているが、彼には「玉虫」という姉がいた。彼女は多くの孤児を扶助し養育していた歴史実績が有る。吉備地方には古来より福祉事業、即ち今で言う利他精神発露の土壌があったようである。

これら例示を少し取り上げたが、洪沢栄一は多方面において援助活動や今で言うコンサルタントの仕事もしている。経済界のみならず、教育文化活動、そして老いては福祉活動にも関与している。その団体組織数は五

百以上を数えるのである。一方経済界の重鎮、三菱の岩崎弥太郎とは社会経済活動においては、思想方向性が違っていて東京の「船宿会談」では事業推進施策の一致を窺ずに会談が決裂したことは有名である。洪沢はその後も経営には財閥形態を採らず、多くをサポートの形で民間経済活動に傾注している。またその晩年においては社会貢献活動も推進している。

現在においても彼の子孫たちは国内のみならず、国際的にも多方面において活躍しているのである。遅まきながら、現在において洪沢栄一の社会貢献の意義が認識され、昨年の令和六年七月には一万円札の肖像画として登場することになった。

このように日本においては、社会のために、他者のためにと慈愛ある立ち振る舞いをする思想が伝播している。しかし欧米のその後の立ち振る舞いは、資本主義の進展と共に強欲で、しかも過当競争に陥ってしまっているのである。生産と需要の需給バランスが形成される時代

では良かつたのであるが、その後は生産力の拡大とともに、需給バランスの崩れや、国家間の

生産効率性の差異が生じたりしている。経済発展の拡大余地が小さくなり、国家間の協調性が取れなくなれば、弱肉強食、自国第一主義の時代になるのは当然となるであろう。協調性、利他主義性は無視され、得手勝手な原材料独占や不適正商品の製造、地球温暖化防止策の不採用など自国中心主義の蔓延を惹き起こしてくるのである。利用や再利用できないもの、変質して有害な物質に転換するものなどお構いなしの生産に加担することにならないか、心配な問題案件が多発する可能性がある時代になるかもしれない。

\*日本画では、ぼかしの手法で中間色を上手く引き出して協調性を図るとかの精神の内面的バランスにも配慮している。しかし西洋画では、明確な対称色彩で自己主張するのが好まれていたようである。しかし近年においては深みのある心象性描写法が西欧人にも好まれてきているのではなからうか。

近年気候変動の大きな時代になって、国際間の協調が非常に重要であるのに、自国優先第一主義や孤立主義、また環境破壊が言われる原材料資財の不使

や回避が叫ばれる時代にあつて、国際間の取り決め方針に逆行する施策を採用する国があることは非常に問題である。現在これら問題案件を国連機構が介入解決する手立てを持っていないのである。覇権国家の立ち振る舞いを防止出来る国際機関の充実が焦眉の急になってきている。

ここにおいて日本国は至誠惻怛の思想哲学を国際機関で発言できるようにしなければならないと感じるのである。古来より言われている「自然との共生」思想は、郷土の偉人「弘法大師、空海」が厳しい修行の中から自然界の摂理を体得した実践的な智慧なのである。日本人は大いなる反省とともに、今後大いなる覚悟と自信を持つて国際間において先進的有効な外交活動を実践してもらいたいと思う。

昨年、被団協に「ノーベル平和賞」が与えられたことに大きな意味があると考えるのであるが、またスポーツ界においては「ご承知、大谷翔平の実績と立ち振る舞いが国際間において大きな反響を生じさせている。彼は日常において自ら身を律して努力していることである。彼こ

そ日本古来より重視されている自然との共生による「美の世界」確立のため日々精進しているのである。何故かスポーツ界OBたちは、このところ政界の政に参画して来ているが、なんら国民の期待する政治実績を上げていないようである。大谷選手とは大いなる隔世を感じるのである。大谷選手はいわば偉大な民間外交を実践しているようでもある。また後進国のアファガンで医療や灌漑事業で活躍していた中村医師の社会貢献活動に、日本人特有の行動美を筆者は感じていたものである。

今回脚光を浴びている洪沢栄一の実績について、素晴らしい利他精神の行為痕跡を歴史から感じとることができ、至誠と惻怛に立脚した行動を実践していた日本人がいたことに、日本人の一員として大いに誇りに感じるのである。これに反して現在日本を先導している政官界人材の多くに哲学感の薄い人たちの行動に啞然とせざるを得ないのである。第二の山田方谷や洪沢栄一の登板を強く期待したいものである。



弔文

突然の訃報に接し 梅美様のご逝去を哀心より謹んでお悔やみ申し上げます

ご生前には 全国まなべ会発足の昭和五六年から長きにわたりまなべ会に積極的に関与され、静岡まなべ会会長を多年にわたり歴任 一昨年より女性初の全国会長として会の持続に大いに尽力して下さいました 梅美様を失ったことは 本会にとって大きな損失であり 誠に残念でございませす。また富士山と末代上人・熱海の会会長として平成二十五年に富士山が世界遺産に指定登録されたことに多大に貢献されたことはまなべ会会員としても誇りであります ご遺族の皆様方のご心中を お察し申し上げます 会員一同心からご冥福をお祈り申し上げます

全国まなべ会規約により ご香料をご霊前にお供えいただきますよう お願い申し上げます  
全国まなべ会 会員一同

故真鍋 壽様ご令室

真鍋 辰子様

なお 令状 返礼などは 規定により一切無用でござります



真鍋梅美会長ご葬儀の様子

お悔み情報

長年にわたりまなべ会活動にご理解とご支援をいただいた役員の方が黄泉の国へ旅立たれました。ここに謹んでご報告させていただきますとともに、安らかにご休息されますようお願いいたします。 本部役員一同

- 全国まなべ会特別顧問 讃岐名誉会長 真鍋 賢二
- 全国まなべ会組織部長 兵庫会長 真鍋 栄三
- 全国まなべ会会長 理事 真鍋 梅美
- 全国まなべ会事務局次長 評議員 真鍋 芳男
- 神奈川まなべ会会長 理事 真鍋 藤正
- 北海道まなべ会 評議員 真鍋 正之
- 広島まなべ会 理事 真鍋 節夫
- 伊予まなべ会 評議員 真鍋 浩一郎

\*全国役員の方がご逝去の折には何卒本部事務局へご一報をお寄せください。

新入会員のお知らせ

- 阿波まなべ会 理事 真鍋 昌司
  - 阿波まなべ会 一般 真鍋 徹一
  - 阿波まなべ会 一般 真鍋 達夫
  - 阿波まなべ会 一般 真鍋 泰典
  - 広島まなべ会 理事 真鍋 武明
  - 伊予まなべ会 一般 真鍋 一平
- 今後とも「まなべ」会員の一人として 交流と親睦を重ねて参りましょう。

長寿賞受賞者

一九四五年生まれ

- 兵庫まなべ会 真鍋 誠次
- 讃岐まなべ会 真鍋 壽利
- 伊予まなべ会 真鍋 憲夫
- 福岡まなべ会 眞部 利應

まなべ会へのご支援、誠にありがとうございます。 今後ともご健勝で活躍されますよう 祈念申し上げます。



# 令和5年度一般助成金の入金者名

自令和5年4月1日～令和6年3月31日

地区	氏名	地区	氏名	地区	氏名	地区	氏名	地区	氏名
北海道	眞鍋 征夫	岐阜	安達 憲一	讃岐	青木 大	讃岐	眞鍋 進	阿波	眞鍋 勝明
"	眞鍋 重雄			"	眞鍋 康正	"	眞鍋 雅稔	"	眞鍋 孝之
		近江	眞鍋 清子	"	眞鍋 康彦	"	眞鍋 洋逸		
東京	眞部栄太郎			"	眞鍋 計夫	"	眞鍋 清高	伊予	眞鍋 政信
"	眞鍋 祥子	兵庫	眞鍋 栄一	"	眞鍋 昇	"	眞鍋 忠博	"	眞鍋 道博
		"	眞鍋 宣夫	"	眞鍋 義幸	"	眞部 勝吉	"	眞鍋 孝敏
横浜	眞鍋 彰	"	眞鍋 善英	"	眞鍋 正則	"	眞鍋 進	"	眞鍋 秀男
"	眞鍋 緑			"	眞鍋 安夫	"	眞部 忠計		
"	間部 武之	岡山	大上 宏己	"	眞鍋 良博	"	眞部 侑平	土佐	土佐まなべ会
		"	眞鍋 敏行	"	眞鍋 功一	"	眞部 威司		
埼玉	眞鍋 義則	"	眞鍋 歩	"	眞鍋 信彦			本部	高口 治子
"	眞鍋 寛子	"	眞鍋 匡輔	"	眞鍋 優介	阿波	眞鍋智恵子	"	眞鍋友子2口
		"	眞鍋 直己	"	眞鍋 正彦	"	眞鍋千恵子	"	眞鍋 護
千葉	眞鍋 久勝	"	眞鍋 秋男	"	眞鍋 光夫	"	眞鍋 正幸		
"	越智 優			"	眞鍋 修	"	眞鍋 一子	北海道	眞鍋 和夫
"	眞部 奉明	広島	眞鍋 良宏	"	眞鍋 雅秋	"	眞鍋喜美子	"	眞鍋 豊志
"	眞鍋 篤典	"	眞鍋 和靖	"	眞鍋 庄二	"	眞鍋 哲世		
"	眞鍋 弘			"	眞鍋 芳治	"	眞鍋美千代	大阪	眞鍋 春幸
"	眞鍋 元禄			"	眞部 直人	"	眞鍋 光信	"	眞鍋 功一
"	大津 華子			"	眞鍋 明男	"	眞鍋昇二2口	"	眞鍋 孝
"	眞鍋 典子			"	眞鍋 浩一	"	眞鍋 隆資	"	眞鍋 憲一

\*全国まなべ会への助成金ご援助誠に有難うございます。  
 今後も会報誌作りなどご期待に添えますよう努めますのでよろしくお願ひいたします。

## 編集後記

今年、昭和百年、そして終戦後八十年を迎える年となっております。わたしどもにとつて何か記念の年になったらと思います。しかしこの程、当全国まなべ会会長の眞鍋梅美さんが突然黄泉の国へ旅立たれました。まづもつて、長年の組織貢献に対し厚くお礼を申し上げ、安らかな休息をとられますようお願いいたします。

さて、このところ感染症であるコロナやインフルエンザの流行がやや落ち着いてきたように感じますが、まだまだ自然環境の悪化もあり今後も各種感染症との戦いを人類は強いられることになるのではないのでしょうか。このためには自分自身免疫力を付けたら高めたりして、自己防衛を図らねばならない時代かもしれません。

このような環境下で外出を控える人や、反対に自由に行動する人もいます。何事にも関心と目的を持って、と、諸々の情報が入り込んでくるようです。広報の仕事の関係上全国大会開催地での地理・歴史などに関心をもつて対応し、いろいろとネタ探しを試みているのですが、如何せん、実際は、現場への踏査は難しく、ただ紙面活字を拾う域を脱することはできません。何事も現場主義が大切なことは自覚しているのですが、SNSなどの人工媒体で安易に入手する場合には、事柄の

眞偽は不明なものもあります。昨今では、眞実でない偽情報が横行錯綜して、確認できません。例えば選挙戦では、偽情報を乱発する悪意行為者がいるために、結果にも影響するものがあります。アメリカでの大手情報通信会社と政治との癒着によるブローカー的行為には、庶民は悪意さえ感じるのではなからうか。

情報化時代にあつても、手づくりの地味な情報でも熱量のある温かい情報の提供が求められるのではないのでしょうか。最近では人工物で対応しようとする機運になっておりますが、この根底には人を第一とし、ない功利者のエゴが潜んでいるようです。これからは人間を第一とする人間尊重の気風が醸成してくればと念じています。日本では、「至誠惻怛」の理念が他の国よりいささか強いのではなからうか。わたし達の会報誌の作成方向は心温まるものを作りたと思つておりますが、何分不手際のみぎり、良いものは出ていません。しかし素材な手造りのものであつても、心温まるものを作りたいと思つて頑張つています。しかし時間と体力の限界もあり、やつこの思いで宝ものと思うものを発掘できませんでした。自画自賛なものです、何分関心をもつて最後までご覧くださいます。